

高校野球部におけるチームマネジメントの実態 ～「もしドラ」に着目して～

The actual situation of the team management in high school baseball club - Focusing on the book “Moshidora”-

1K09B165

指導教員 主査 原田宗彦 先生

林 和樹

副査 青木宏至 先生

【序論】

近年、さまざまな組織において、個人の強みを最大限に活かす「チームマネジメント」の導入が大きな成果をあげている。日本野球界も例外ではなく、すでにプロ野球では、監督やコーチ、トレーナーの指導や、選手固有の専門的能力の評価についても、「チームマネジメント」の概念を活かした他にも、先発投手とリリーフ投手の分業制など、現在の野球界において、理論的なチームづくりは実践されている。

2011年に、「もしも高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（以下「もしドラ」）という岩崎の著作が累計270万部を突破し、その基本骨格となったドラッカーの「マネジメント」とともに、大きな社会的注目関心を集めた。

高校野球界においても、「もしドラ」でも注目されたような「チームマネジメント」の概念が導入されつつあるが、実際にどの程度浸透しているのか、またそれがチーム強化に有効であるのか、これまで具体的に調査した報告はみられない。

【目的】

高校野球部員を対象に、ドラッカーの提唱する「マネジメント」の概念を数値化した自作の調査表によるアンケート調査を行い、各因子と公式戦の成績との関連性を、統計学的手法を用いて検討する。

【方法】

ドラッカーの「計画と成果の循環図」をもとに、「もしドラ」で展開されるストーリーと、ドラッカーの「マネジメント」の概念を引用して、6因子21項目からなる自作の調査票を作成した。事前に監督、顧問の先生方からの調査許可を得た東京都高校野球連盟傘下の高校野球部の1・2年生を対象に、平成24年9月～11月に、匿名の自記式アンケート調査を実施した。

分析は、(1)「顧客」から(6)「査定」における各項目の尺度得点を算出し、学校別に各因子の合成得点を比較した。

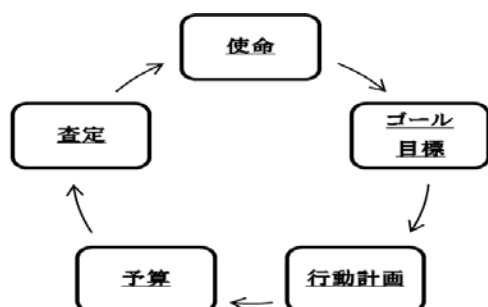


図1 計画と成果の循環図(ドラッカー, 2001より筆者作成)

【結果】

強豪5校(240名)、中堅4校(195名)、弱小5校(101名)の計14校536名の高校野球部員から回答を得た。

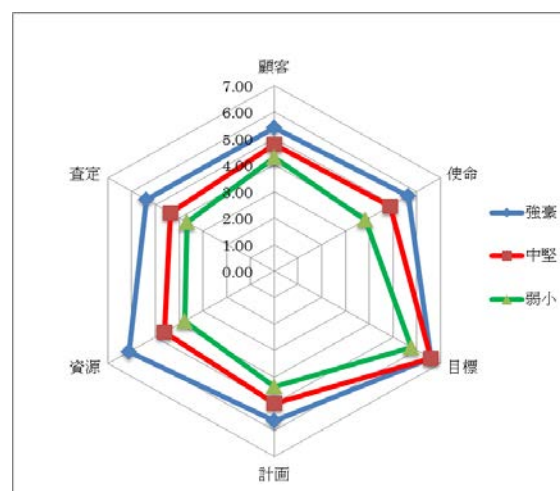


図2 各群による各因子の合成得点の比較

【考察・結論】

アンケート調査から、高校野球部の大会成績と部員の「マネジメント」に関する意識との関係性を分析し、「もしドラ」にならって、経営学の観点から、高校野球における指導者のありかたについての検討を試みた。

強豪校、中堅校、弱小校の3群に分けて集計した結果、強豪校では比較対象とした全ての因子で統計学的な有意差をもって高い数値が得られ、弱小校に比して選手の「マネジメント」への意識がより一層高いことが判明した。また、中堅校の数値は全てが強豪校と弱小校の中間であり、チームの競技成績は、選手の「マネジメント」力と比例関係を有していた。

チームの実力は、個々の部員の身体能力や経験年数、練習環境などに大きく左右されることが予想されるが、本研究結果からは、弱小校においても、指導者が積極的に「マネジメント」の概念を導入し、選手に適切な指導を行うことによって、チーム全体の意識改革をはかり、中堅校、強豪校へと変身させることができる可能性があることが示唆された。

「もしドラ」での取り組みはドラッカーの「マネジメント」の概念の一部を拡大解釈したものであり、高校野球における「チームマネジメント」の重要性について妥当性があるという根拠はない。今後本研究を発展させる際には、多方面からの情報収集を行い、総合的な検討を行う必要があるであろう。